

■「前衛的」「頭痛の種」「製図室のない学校」「有名建築家輩出校」「ユニークな建築教育」「多国籍の文化のるつぽ」「アンソロ・サツワン系では最古」などなど様々に形容されるロンドンにある建築学校、A.A.スクール（Architectural Association School of Architecture）について学生として教師として体験した建築家教育について話してみたい。

初めに断っておきたいのは、これをA.A.スクールの説明ではなく、一人の日本人建築家の体験談として読んでいただければということである。というは、A.A.スクールは、その独特なユニットシステム（研究室、スタジオ）の教育プログラムによって、その体験はまったくと言ってよいほど異なり、A.A.スクールの印象と意味が各人によって異なるからである。

昨年、建築家倶楽部で、個展を開き講演会を行った「原寸」。『建物でない建築』というタイトルで、A.A.スクール

でのプロジェクトを扱った。興味深かったのは、展示作品のみならず、A.A.スクールの建築教育にも質問が及んだことである。つまり、そのような作品や考え方の土壌となったA.A.スクールについて知りたくなったという要望なのである。

ここから、建築のプロセスや建築家教育を見る上で新たなキーワードを見つけていただければ幸いである。二回シリーズで、「ユニットでの驚き」から「大学院での経験」そして「教師の苦悩」という順序でお話したい。

1 ユニットでの驚き a 目的のない課題

「なんだこりゃ、目的がいっさい書かれていないではないか」。ユニットでの最初の課題のブリーフに目を通して驚いた。「リパブルストリート駅に朝八時に行きなさい。そこで少し変わった人を見つけて、その後を尾行しなさい。その人の動作、行動、その人が出くわすことすべてを、忠実に記録し、都市との関係を考えなさい」という内容。

私が経験した課題では、敷地が与えられ、そこに目的として建てる建物の種類、規模などが与えられていた。この課題にはいっさい設計目的が書かれていない。しかし行っている暇はない。翌朝さっそく駅に帰った。

私は四時間の間、通勤者、学生、淫行者、主婦などを尾行した。何人かは私に気づき尾行は失敗したが、上手くいったケースで、その日の午後、チュートリアル（個人教授）を受けた。教師からは「服従学校の学生の尾行が面白い。その学生を見つけて学校内でも尾行しなさい」というアドバイス。まいったなあと思いつつ、次の日から駅でその学生を探した。やっと三日目で見つけることができた。何か悪人を持つ気分である。

私はこのときから「服と体」がテーマとなったが、他の学生はOLを尾行してその香水の香りから「良い」がテーマとなり、また尾行した浮浪者から「ゴミ」がテーマになった学生もいた。どうやらこれは「各自のテーマ探し」なのである。

b 何度もあるシュリー（作品評議会）

作品評議会は通常、作品（成果物）が完成した後に開かれるが、A.A.スクールの場合はプロセスを重視するため、途中に何度もシュリーがある。多くはユニットの先生のみならず、他のユニットの教師、外部からも建築家を招いて行なわれる（写真）。

私は体と服との間の空間に興味を持った。体は唯一のもので「内側で私的」、服は標準的なものであり「外側で公的」と考えられる（写真3）。その間の空間というのが、日本の住宅で言えば「縁側」のようなものに驚かると考えたからである。ジョリーでは調査のデータと分析を表現したカラージェなどを説明した（写真4）。

c 原寸と体験で考える

講評の中で「原寸と体験で考えなさい」というアドバイスがあった。これはよく言われることであるが、縮小されたモノはサイズを小さくしただけではなく、



写真1 建築家倶楽部で行った個展「建物でない建築」の様子



写真2 個展「建物でない建築」の様子

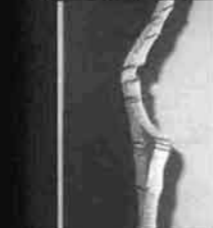


写真3 縮小された模型に注目した観客の様子



写真4 原寸の模型と縮小の模型の両方を展示したカラージェ



写真5 原寸の模型と縮小の模型の両方を展示したカラージェ

AA スクールから得たこと

「連載」①

何か大切なモノを失っており、原寸で見ることによって本質的な探求ができるという意味である。また、資料に頼るのでなく、自分自身が行った調査、体験からデザインすることにより独創性が生まれるという考えである。

私は早速、原寸すなわち服飾デザイン用のタミーモデルを購入し、自分の体を使って探求することにした。まず双方の表面積と断面のスタディーを行った(写真B)。この中で、自分の体の型をブラスターで採る作業は大変であった。自分の体に水で浸したブラスター紐帯をクルクル巻きにして、固まってから切り取り、前後に外すのであるが、はさみでは硬くて切れない。カッターナイフを使う



写真C
自分の体の型をブラスターで取り、断面のスタディーをこなす様子

が強くなると身を切ってしまう。「私的」なモノの大変さ、痛み、微妙なバランスを実感したのである。

d 概念モデルと実験の意味

「今までの探求の中から得たモノを使って概念モデルを削り、実験をしながら」という指示書がまわってきた。体の中の空間に興味が及んでいたので、私はタミーモデルを切ってスーツケースを作した(写真D)。スーツケースという入れ物が、一番わかりやすい空間の表現と考えたからである。これを使って透明のソフトジャケットを制作し、人間の動きと空間の変化をスタディーした(写真E)。概念モデルは、調査の結果や印象をま



写真D
タミーモデルからスーツケースを作り、それを原型として作る

とめても良いし、それを使って様々な実験を行なうこともできる。インスタイル・ションも体験という要素を取り入れた立体的な装置であり、概念モデルと考えることができる。よく教師から言われるのは、結果がわかっているのであればモデルを削る意味がない、モデルを削るプロセスの中で考えたり、モデルを使って実験する中で、アイデアを発展させることに意味があるという考えである。つまり、モデルは単なる立体の「結果の表現」ではなく、「探求の道具」として使うという意味である。

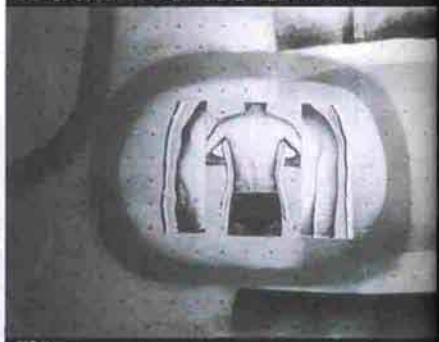
■ここで体験した様々な驚きは、私が日本で受けた建築教育と実務経験の中で

考え方を、一八〇度回転させるほどの強いインパクトを持っていた。



ユニニットシステム 建築家の師弟関係にヒントを得た教育システム。一、二人の教師と十、十五人の学生から構成されるユニットと呼ばれる研究室。スタジオが学内によくかあり、学生は自分の気に入ったユニットを選び、インタビュを受けます。合格すればその学生と連日(二年生に三、二、三年生十一、四、五年生生にユニット)。一年間の教育プログラムは全面的に各ユニットに任されているため、独創的でユニークな建築教育が行なわれている。

(むじ) たてお/建築家



写真E
ソフトジャケットをつくり、体の動きと空間の変化のスタディーを行なった

■創意的でユニークな建築家教育を行っているロンドンにあるAAスクール (Architectural Association School of Architecture) において、学生として、教師として体験したことをお伝えしているが、今回は「大学院での経験」をお話したい。

2 大学院での経験

a 分野にとらわれないテーマ設定

AAスクールには一年生～五年生のディプロマコース以外に大学院がある。私はAAスクールに入って二年目に、インターミディエイト(ユニット)から大学院に移った。ユニットでは主にデザインを中心とした教育が行なわれているが、大学院では自分の興味のある分野で研究をすることができる。分野には「歴史と理論」「環境とエネルギー」「住宅と都市」「グラフィックデザイン」がある。これらのコース間では、履修科目に互換性があり、自分のコースにこだわらず自由に講義を選択することができる。GRADU-

ATE DIPLOMAは一年間 GRADUATE HONOURS DIPLOMAは二年間を経て取得することができるが、ほとんどの学生が論文をまとめるのに一～二年程度かかる。P.D.Dは一年九月以上で履修が、論文提出登録の条件となっている。私の場合は、一年半をかけて「英国のコーポラティブハウスの研究」でGRADUATE DIPLOMAを取り、さらに一年半をかけて「創造性における建築教育の研究」でGRADUATE HONOURS DIPLOMAを取得した。計一年間の超過である。各自のテーマは、分野にとらわれない柔軟に設定することができる。住宅と都市の分野でも、私のように建築教育を研究する学生がいたり、建築を映画を通して歴史的に考察する学生などさまざまである。研究テーマは、学生の興味によって設定されるという考え方が当然とされており、研究室の分野に左右されるというのではない。最初の段階では、学生が対象範囲を擇り過ぎることをよくあるので、教師

は学生に対し、できるだけ目を開かせるよう指導している。したがって、探求の方向によっては当初のもくろみを外れ、結果として分野を相違なテーマが出てくるものも稀ではない。

大学院では、履修科目の中にワークショップといふ設計の講座がある。ここで体験したことを話してみたい。

b 「水の橋と家」のプロジェクト

b-1 地球全体が敷地、目的は各自が設定?

課題を見つけた。ロンドンの東、テムズ川下流には世界最大のドック(池など)を利用して造った人工の内港、ロイヤルアルバートドックがあり、その周囲の約200haをすべて敷地なのである。ここを調査して目的を設定し、何らかの提案をするのが課題である。まず最初にわれわれはドックランド開発公社を訪れて、この地域の開発計画や問題点などを聞いた。また、開発される側として地域住民の意見を聞く公聴会に出席をした。

先に資料にあたるのではなく、まず生の声を聞く。そのプロセスの中で自分の方向を見つけ、必要資料を集めていくのである。そして各自の興味で探求が始まる。

b-2 採集した水(現物)を飲んで議論?

私は水に興味を持ち、まずテムズ河の水とドックの水の特徴を知りたいと思っただ。テムズ河の水とドックの水に緑の具を車らし、紙を役して水面のプリントを採集した。流れのないドックの水面からはきれいなプリントが採れたが、流れのあるテムズ河からのプリントはあいまいであった。そして両方の水をペットボトルで持ち帰った。また水面の反射への興味から、さまざまな場所で写真を撮り、カラーシミュレーションにまとめた(写真1)。

ワークショップでは週に一回のミーティングがあり、各自が途中経過を報告する。私はデザインプロジェクトを扱ったが、ある学生は社会的なもの、ある学生は歴史のものをテーマにするなどさまざまである。履修している学生は十人



写真1: テムズ川とドックの水面から採集したさまざまな色のプリント



写真2: ワークショップのミーティング。もともと2人目のピアース・カフ



写真3: パン包を早く蒸気して水蒸気のテクニクを学ぶ実験



写真4: 水蒸気の水蒸気の反射を染めしめる種をデザインする



写真5: 種の型をつくる。馬車、クラフ、ジョン、馬の形

AA スクールから 得たこと

【連載②】

教師であるピアーズ・ガフがアドバイスを
得たこと

位であるが、履修していない学生や学部
の学生も加わり、多いときは二十人を超
える。これを一二人の教師が担当する
「写真2」。私はコラージョなどで経過
を報告し、質問とアドバイスを受けた。
面白かったのは、採集した水が入ったベ
ットボトルをきっかけに多くの意見が出
たことである。水道が民営化されて地域
による価格差が大きくなったという社会
問題や、水辺に住みながら人の心理など
さまざまなことが話題となった。私のプ
ロジェクトの方向などおかまひなしに、
ベットボトルを握り締め議論する学生な
どがいて面白い。現物がなせる技かなあ
と考える。

b1-3 何でも徹底的にやるー青いバ
ン?

「アンコンベンショナル(非慣用的)
でやるなら徹底的にやるべきだ」。私が
従来の設計プロセスに疑問を持ち、新た
な方向が見い出せなかったときに、担当
教師であるピアーズ・ガフがアドバイス

をした。ガフはテムズ河沿いに三角形の
立面を持つ奇抜なデザインの家を住宅
(Canalide)を設計して、チャールズ
皇太子に目の敵にされた名建築家であ
る。そこで、私は自由な視点で自分自身
に刺激を与えるべく実験を行なった。敷
地にパン工場跡があったことから、パン
で水面のテクスチャーを表現してみよ
うと考え、パンを青く塗装して表面を
サラサラっぽく包み、写真を撮ってコラ
ージュを作った(写真3)。このプロセ
スで、異なる材料で水のテクスチャーに
近いものが表現できることの面白さを感
じたと同時に、青いパンという目頃見受
けない刺激から素材の意味を考えた。

b1-4 スケールを渡さるー振り出し?

その後、ポートの波の軌跡や水面の反
射などをヒントにドック全体を見渡せる
橋をデザインした(写真4)。模型をつ
くって反射や波状の形を表現した(写真
5)。これをロイヤルドックに配置して、
概ねこのプロジェクトはまとまりそうだ

なあと。たときに、「それはそれで置
いておいて、橋という大きなスケールか
ら住宅という小さなスケールで水を探求
したらどうか」。またもガフ教師の強
烈なアドバイスである。このような展開
はよくある。つまり、学生の作品が小さ
くまとまるのを避け、同じテーマでスケ
ールを変えようか。敷地を変えようか。
何らかのシフトをするのである。私はテ
ムズ河の水の流し引きを利用し、中から
層根を落ちる水が見える家を考え、模型
をつくり確かめた(写真6)。

b1-5 デザインの要素を加えるー音の
デザイン?

家庭の身の回りの水の調査として、ト
イレーキッチンの水や窓に結露した水の
テクスチャーの写真を撮り、その音を録
音した(写真7)。これらの経験を含め
水の住宅のデザインをし、コラージョに
まとめた(写真8)。私としてはこれで
完成と考えていたが、ジュリー(講師
会)で、「水のステディーから住まいを

デザインしたのはわかった。しかし、音
を調査したのに音を提案していないでは
ないか」との指摘を受けた。つまり音と
いう要素を加えてデザインしろという意
味である。私は、水の音の原点として、
自然の音を体験したくなった。幸いに、
アメリカ東海岸への研修旅行があったの
で、ナイアガラ滝の音と、フランク・
ロイド・ライト設計の落水荘を訪れ、そ
の水の音を体験し、録音してきた。この
研修旅行では、コロンビア大学との交換
ジュリーがあり、他の大学の教師からも
講評を得ることができた。AAの多くの
教師が国際的な交流を持っており、海外
の大学との交換授業などが、研究室ごと
ユニットごとに日常的に行なわれている。
ロンドンに戻り、私は自然の音(ナイア
ガラ滝、落水荘)を伴奏に、ある作曲
家に頼み、この「水の見える家」に相応
しい「水の曲」をアレンジしてもらった。

「暮らし・たけお(建築家)

水の中を泳ぐ魚を写す水の中を泳ぐ魚を写す水の中を泳ぐ魚を写す



写真5: 水の中を泳ぐ魚を写す水の中を泳ぐ魚を写す水の中を泳ぐ魚を写す



写真6: 橋の周りにある家群の水の透過。テクスチャー



写真7: 水の透きかた特性からデザインした水の家の水のコーラージュ

■創意的でユニークな建築家を教育を行なっている、ロンドンにあるAAスクール (Architectural Association School of Architecture) において体験したことをお伝えしているが、今回は「教師の苦悩」をお話ししたい。

3 教師の苦悩

薄英五年の内、三年間を学生として、後の一年間を教師として過ごしたわけであるが、この立場を変えた一年間は半生のときには気がつかなかったことを学ぶ貴重な機会となった。私はAAスクールでティプロマ(四・五年生)のユニットと大学院の住宅と都市の研究室を教師としていたが、あわせて東ロンドン大学で非常勤講師をしていた。それぞれ異なる刺激的な体験となったが、ここでは、とくに印象的であったティプロマのセドリック・プライスのユニットでの教師体験を中心に話したい。

■1 セドリック・プライスの助手になる

私の大学院のティプロマ論文は、ユング心理学の考え方を前期課程を手がかりに設計のプロセスや建築教育に活用できないかということ論じたものであるが、それを建築教育には含意のある考えを持っている建築家のセドリック・プライスに認められた。彼の事務所に通じた。当時彼はAAスクールの教員で

はなかったが、たびたび大学院の設計課評会に顔を出していたので、私のことを知っており、快く応じてくれた。次に彼に会ったのは年度始めに行なわれるユニットの説明会であった。ティプロマのユニットを彼は三十年ぶりに持つことになったのである。彼は私に会うや、すぐに私の論文の話を始めた。セリスとトラライアントの関係と教師と学生との関係を重ね合わせているのが面白いというポジティブな評価であった。すくなく私は以前から思っていることを言った。「あなたのユニットで教えられるか。彼はニヤツとはほええ、それは良いのだが、論文の仮説を実際に試してみるのですね。早速、次の日のユニットミーティングに私は助手として加わった。ユニット名はTASK FORCE(機動部隊)である。(写真1)

■2 学生とユニットの契約

AAスクールでは、学生が属したユニットを選び、またユニットも学生を面接で選ぶという、互いに選りあった関係において一年間の教育プログラムが行なわれる。セドリック・プライスは、さらに徹底しており、学生との間に実際に契約書をかかわす。この中に、学生が自分のやりたいテーマ、その方法、評価する視点を記入し、両者がサインをするのである。述べているような内容が書ければ、その程度、契約内容を修正する。学生は

金を払って教育を受けに来ており、教員は学校から給金をもらって学生を指導している。その関係を師弟関係としてではなく、対等な立場で理解に保証しているのがこの契約書なのである。

■1 私も騙された? 教育プログラム

抽象的な思考から現実的な思考への変換
セドリックが出した最初の指示は「各自のテーマを、役に立つというような枠を考えずに自由に探求すること」であった。これは、テーマからさっかかけをつかんで、その探求の中から何かをデザインするプロセスになるが、彼は「役に立つ」ということを考えずにデザインするのはとても難しく、さっかかけをもっとも単純な形で振ります。これがポイントである」と説明した。その説明通り学生はかなり苦悩し、私もできるだけその主旨に沿ってサポートした。二学期に入り、各学生のプロジェクトに目算がついてきたときに、セドリックは突然「建築家としての社会的意義を考えたプロジェクトは見直さない」と言った。これには私はビックリした。この意味は、明らかに今までの方向とは反対で、社会に貢献するつもり役に立つものを考えなさいということである。もちろん学生も動揺した。

私自身、混乱していたのでセドリックに聞いてみた。すると「これは最初から考えていたことだよ。抽象的な思考から、

具体的な思考に大きくシフトする訓練なのだ」と。それなら、なぜ助手である私にそのことを説明してくれなかったのか」と私は声を荒立てて聞いた。「もし、私がそれを話したら、君は全体の流れを描いて指導することになる。それは秘密にするにせよ間接的に彼らに伝わり、本当の意味でのシフトにならないからだよ」とセドリックは言った。私自身もシフトチェンジの訓練となった。これには説明である。(写真2、3)

■2 学生ではなくメンバーである

学生と同じ目の高さで接することが大切
「彼らはMEMBER(メンバー)である」とセドリックは私に向かって厳しい表情で答えた。そろそろ追い込みという三学期に入り、各学生の進捗状況を彼と話し合っているとき、私が学生に対してSTUDENTS(学生)という言葉を使ったことに對して彼が注意を促した。そこには、彼らを学生として見るのではなく、一人の村長の建築家として尊重する彼の姿勢が現われている。このことについて後に、「教えるという上からの立場でメンバー(彼の言う)学生」に接しても、彼らの創造性を刺激することはできない。同じ目の高さでわれわれも影響を受けることによつて、面白いものができる」と話した。これに対し私が、「これはエングの言う『寛容』(寛容)とどう違うか、彼は「そうかもしれない、違うかもしれない

AA スクールから 得たこと

【連載③】

れない」と言って筆を置くわえたまま腹を笑った。

b-3 個性の強い学生たち。学生が教師を選ぶ意味

「あなたの個人指導を受ける必要はない」と私に向かってある学生がはっきりと言った。彼のそのときのプロジェクトは、調査分析はしているのであるが、デザインにジャンプ（昇華）がなく、一般的なコンセプトで魅力に欠けていた。私がこれを打開しようと話し合いを持ちかけたことに對しての返事である。ビックリし、またムカカもしたが、考えてみれば彼のプロジェクトは彼のものであり、われわれ教師のものではない。彼はセトリックのユニットを選んだのであって、助手の私を選んだのではないのである。彼がどのように教師を使うかは彼の選択なのである。彼のプロジェクトの進捗具合を心配する私に對して、セトリックは「卒業できなければ彼の責任であり、そ



写真1: ディプロマユニット、TAM FORCEのメンバー、教師2人に対し学生3人。坐っているのがセトリック・ブライス。その他は私、一筆はビルディングデザイン誌の建築評論家、シャーマー・メルビン



写真2: チョートリアル（個人指導）の様子。右から学生、セトリック・ブライス、私



写真3: 同僚もシュリー（真評会）が行なわれることにより、プロジェクトは発展する



写真4: 直観審議の様子。学生は自分の作品を教師に説明する



写真5: セトリックのユニットの展示コーナー。学年末の展示会に各学生の作品が展示される。作品の多様性やクオリティがわかる

のプロジェクトを削るのも彼である」と断言した。どうやら、私は彼のプロジェクトにのめり込み過ぎている、私が削っていいかという思い上がった気持ちを持っていったようである。

b-4 進級審査での苦闘。プロセスと結果の相対関係が大切

年度末に行なわれる進級審査は、学生がテーブルで三、五人の教師にプロジェクトを説明し、質疑の後、判断が下される（写真4）。概ね学生の半分、三分の二しかパスしないという厳しい審査であり、学生・教師とも緊張する場である。私は審査する立場であったが、自分の担当学生の審査のときは説明側になることとなった。学生が自分のプロジェクトの説明を終えた後、教師だけで審査するのであるが、プロセスと結果との関係がハッキリしなかったため、セトリックは私にプロセスを他の教師にわかりやすく説明しろと言われた。この学生は様々な角度

からものすごい量の調査をしていたので、説明は困難を極めた。加えて、私の詳細も聞かれたので、パスさせたいとはいえない点だけを強調することはできず、ネガティブサイドも客観的に説明せざるを得ず、ヒヤ汗ものであった。結果は、幸いパスであった。審査の際の問題になるプロジェクトは「デザインだけを表現しており、プロセスがわからないもの」、あるいは「プロセスがわからぬもの」、あるいは「プロセスがデザインをしていないもの」や「デザインにジャンプが無いもの」である。建築の意味は多様化しており、またその評価も多様化しているのである。評価軸をプロセスと結果との関係に求めるのは当然のことであろう。（写真5）

■ディプロマと大学院。そして教師の体験を話してきたが、AAスクールが私の建築に対する考え方に大きく影響を与えたことは間違いない。分野にとらわれず建築の意味を広く捉え、プロセスを大切にした創造的な建築教育は、苦悩の中に自己実現の楽しさがある。それまでの私の建築の価値観がいかに狭く、自ら建築をつまらなくしていたかに気がつく、貴重な経験であった。